

藤村におけるキリスト教の意義

林 盛 奎*

(e-mail : imsung@bu.ac.kr)

目 次

一 序論	五 『春』断章
二 明治期の文学とキリスト教	六 『家』断章
三 藤村詩と讚美歌	七 『新生』断章
四 『破戒』断章	八 『夜明け前』から『東方の門』に至るまで

一 序論

明治五年、日本人による最初の教会が設立、翌六年にはキリスト教の禁制が解かれるが、すでに宣教師たちによって伝道されていたプロテスタント信仰は近代日本と深い関わりを持って現れる。

近代日本文学をキリスト教の視点からとらえる場合、明治期・大正期・昭和期の間には顕著な現象があることに気がつく。明治文学が、何等かキリスト教とのかかわりを示して成立したことは、いうをまたない。しかし、そのことは近代日本の文学者が、キリスト教への入信、あるいはキリスト教への積極的な関心を持っていても、その神を信じ、信仰に専念したということにはならない。実際、キリスト教に接近した文学者たちの入信を考えると、神を思慕し、渴仰する心とはほど遠い場合が多い。それゆえ、彼らはいした離反の苦悩も伴わないまま、その後キリスト教から離れるのである。しかし、キリスト教思想は、彼等の心に何らかの形で残存して、彼等の思想の一部になってその文学上に示されることとなる。

本論では、作家藤村の明治期におけるキリスト教の影響と、キリスト教への接近と離反を

* 白石大学校 教授、日本近・現代文学 専攻。

通して、藤村の苦悩・葛藤の文学的意味を各作品に即して明らかにする。西洋近代思潮・ルネッサンスとしてのキリスト教の受容、近代精神による自我の目覚めは、古い道徳・価値観に支配されている社会との衝突を呼ぶ。藤村が近代精神と古い道徳・価値観とどういふ対決をしたかを明らかにしていきたい。

二 明治期の文学とキリスト教

日本の明治文学者のキリスト教への接近と離反のパターンにはだいたい四つの流れがある。

一つは、キリスト教思想に接近するが、文学者としての自覚とともにキリスト教から離反するケース。

二つは、キリスト教思想から異端的信仰に傾倒したケース。

三つは、一生続けて信仰を持ち、文学と縁を切るケース。

明治文学史をキリスト教の観点から語る時、キリスト教文学者が信仰に接近し、離反する過程を、このように三つのケースを挙げて説明することができる。私は、ここにもう一つを挙げたい。四つ目は、文学者としての自覚とともに、作家の生涯の中で、キリスト信仰を曖昧にしたまま、作家的な営為をしたケース、これらには国木田独歩、正宗白鳥、島崎藤村らがいる。明治文学を担った作家たちは青年期にキリスト教に入信し、あるいは積極的な関心をよせるが、作家的に成熟するにつれキリスト教を離れ去る者が多い。あるいは信仰的な意識は失わなければ異端的信仰に傾倒した者が目につく。例えば、明治二十年代のロマンティズムの思潮の中で「文学界」を担った中心的な作家たちであるが、北村透谷と島崎藤村をはじめとして「文学界」同人の殆どは洗礼を受けたプロテスタントであった。民友社グループでは植村正久の洗礼を受けた国木田独歩や正宗白鳥などが挙げられる。そして自然主義に移行していった島崎藤村、岩野抱鳴などキリスト教文学者が明治期の自然主義文学に果たした役割は大きい。明治期における社会主義的理想主義的文学傾向はだいたいプロテスタントの思想の中から生まれている。例えば徳富蘆花や木下尚江らである。彼等の影響は白樺派の理想主義につながってゆくのであるが、それは大正期文学の現象として論じるべきである。白樺派の代表的人物である武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎などは明治期におけるその青年期に内村鑑三のプロテスタンティズムから大きな影響を受けている。このように明治期の文学を考えると、その浪漫主義・自然主義・理想主義文学などが、キリスト教と深い関わりを持ったことが理解される。

しかし、ここで考えるべきは明治文学を担ったキリスト教の洗礼を受けた作者たちのほとんどが若い時期にキリスト教を離れることである。信仰告白によって一度は洗礼を受けた彼等

が、作家的な成熟度の増加にともない教会を離れ信仰を捨てるという問題をどう解釈すればいいのか。彼等のほとんどが背教という形で文学を作り出しているのはなぜなのか。

信仰告白の問題……。一つは、佐古純一郎の指摘¹⁾にあったように彼等の信仰告白の問題である。信仰告白というと個人の問題であるが、明治の作家のだれにも背教の形態が見られるのは明治期におけるプロテスタントの信仰告白の在り方ないし性格との関わりを考えなければならない。藤村は「彼の基督はあまりに詩的な人格の幻影」（『桜の実の熟する時』）のようなものであり、独歩は「私は決して基督信徒にあらざるなり」と言って、「カーライルを夢み、ウォールツウォースを夢み、バーンスを夢み、今又西京に於て基督信徒を夢みんとす」（『我が過去』）という人格を持つ神だったのである。

文学の原理……。もう一つは、彼等が抱いた文学の原理である。ヨーロッパの近代文学の原理はルネッサンスに出発した人間性回復の主張に基づくものである。ダンテが近代文学者の創始者であった。ギリシア文学は文学の三つのジャンルとして、叙事詩、抒情詩、戯曲の三つのジャンルを確立し、それ以来ヨーロッパ文学ではこの区別がだいたいにおいて守られてきた。しかし『神曲』は叙事詩でもあり、抒情詩でもあり、戯曲でもあって、ダンテは今までの西洋文学とは違うまったく新しい文学のジャンルを生み出すのである。もう一つはキリスト教による西洋文学の復興が『神曲』において初めて遂げられていることである。それは聖書から取材したからではない。『神曲』の中にながれている思想は「外界の物事に囚われずに心霊を尊重する²⁾」ことであり、神を思慕し、渴仰する神の国も心の中にあるべきであるとする。このようにキリストの教えは文学者の眼を心へ向けさせる。信仰深い者の生活は心の中に行われる。ダンテの『神曲』を一見すれば「人間はその精魂さえ正しければ憂世の波風に揉まれてもそれによって浄化されて終に天国に達する³⁾」ことが可能となるのであり、これはゲーテの思想に繋がる。この思想の源泉は聖書のヨブ記で求めるべきである。

十六世紀に起こったルネッサンス（再生・復活）は宗教改革と合致し、プロテスタンティズムはギリシア文化を復活させようとしたルネッサンスと共通した精神構造を持っている。教会や儀式などに信仰の基礎を求めなかったプロテスタンティズムは、聖書だけが信仰の根幹であると考え、キリスト教をもっともその起源に近い形の聖書に戻そうとした。このヨーロッパの伝統はそのまま十九世紀のロマン主義・リアリズム主義に引き継がれる。ロマン主義文学の特徴というものは、フランス革命によって形成される個人主義である。

革命以前（フランス革命・筆者注）の旧制度時代の道徳や政治はキリスト教を基盤にしていた。大革命を思想的に準備した啓蒙思想家たちはそのキリスト教を徹底的に叩きつ

1) 『宗教と文学』（『佐古純一郎著作集』第二巻一九六十年十一月、春秋社）

2) 鼓常良『西洋文学の歴史』（一九六九年九月、勁草書房）

3) 同註2

ぶってしまった。貴族や、民衆支配のために宗教という阿片を必要としていたブルジョアジーはキリスト教を復活しようと躍起になったが、もはや確固たる神学体系を再建し、信仰を不動の基礎の上に置くことは不可能であった。そこでロマン主義者たちは理性で神を証明することを諦め、宗教を感情の上に建て直す。不安におののく人間は神を求めずにはいられない、だから神は存在すると彼らは主張した。これは哲学的にはナンセンスだが、感情的に人間の弱みを突いた議論である。⁴⁾

理性による神の証明は不可能となったが、感情的には神の存在を認めようとしたものである。これは理性主義、合理主義では割り切れないものが革命後の社会に現存することがはっきりしたこと、資本主義社会の発達によって生じる社会の諸矛盾から革命に対する幻滅が生じたことが背景にある。しかし、信仰が復活しても、人間の真の自由は得られるべくもなかった。これがロマン主義文学に絶えず不安な気分が漂っている理由でもある。頼りにできるものは自分以外にはないと、自我にしがみついた文学が出現する。革命による大変動の時代は、自分の運命をその大変動に委ねることの出来ない時代でもある。作家は大革命によって出現した不安定な資本主義社会に組み込まれてしまうのである。

明治文学をヨーロッパ近代文学の受容期として読み取る場合、キリスト教の伝統のない日本の近代文学はヨーロッパ近代文学の私生児にならざるを得ない。「文学界」同人はもとより、藤村はヨーロッパルネッサンスの根本に流れる「神と人間の対立から共存・解放へ」という、ヨーロッパ思想の抱く原理的苦悩と懐疑にまでは、おそらく思いおよばなかった⁵⁾」のではなかろうか。「文学界」同人らはキリスト教を受容したものの、日本のキリスト教は、「西欧の中世的権威の重みをもつほどにまでは、まだ成長していなかった⁶⁾」のである。ヨーロッパヒューマニズムによる人間追究には、〈宗教〉と〈文学〉という相反するテーゼを内包している。ヨーロッパのヒューマニズムは、〈宗教〉と〈文学〉との対決によって人間形成を達成しようとしたところに意義がある。ヨーロッパの近代文学において、信仰と調和する文学が成り立っていないこともそのことのあらわれにほかならない。この対決の勝負は最初から判っていて、信仰との対決を懐疑し、その調和を模索する分岐点に立つからこそ、現代文学の道が開くことになる。

明治期のキリスト教入信作家たちが主に十九世紀のヨーロッパ文学に自分の文学の源泉を求めたとき、彼等にとって「信仰者でありながら文学するということはついに不可能であった⁷⁾」だろう。しかも、彼等は信仰の稀薄さのゆえ、何の信仰上の対決もなしに、何の

4) 日高八郎外『世界の文学』（一九七六年十月、新日本出版社）

5) 伊東一夫「明治時代におけるヒューマニズム思想の移植と定着の考察」（『近代思想・文学の伝統と変革』昭和六一年三月、明治書院）

6) 同註5

7) 同註1

信仰上の苦悩を伴うことなしに教会を退き、自分の文学の世界に移行したところに、彼等の離反の性格があったのである。

明治維新とともに逸速く伝道を始めたキリスト教はプロテスタントであり、キリスト教も、また文明開化運動の一翼を担わねばならなかった。欧米との不平等条約の改正をめざす明治政府は、明治十八年頃より急進的な欧化主義を取り始め、それはキリスト教への寛大政策ともなり、明治六年以来のキリスト教は日本で次第に大きな力と成ってきた。伊藤内閣の文部大臣森有礼が、「日本語を全廃し、これに代えるに英語を以てしようとしたこと」は周知の事実であり、加藤弘之は、その人種改良案を論じ「日本人種は劣等だから、すべからくヨーロッパ系と雑婚し、できるならば大和民族に代えるにコーカサス族を以てしよう⁸⁾」という論を発表した。言語や人種の改良論までの思想の発展は、明治期の日本が近代ヨーロッパ文明に接した時の強烈なショックを物語っている。このような欧化時代の訪れとともにキリスト教は物量面での膨脹を見せ始める。

たとえば、福沢諭吉は明治十七年「時事新報」にキリスト教を国教にすべしという社説を書き、進化論を引用して欧米文明国の宗教であるキリスト教の衣服を着ねばならないと論じている。藤村の『桜の実の熟する時』に「輝いた顔付の青年等と連立つて多勢娘達の集る文学会に招かれて行き、プログラムを開ける音がそこにもここにも耳に快く聞えるところに腰掛けて、若い文学者達の口唇から英語の暗誦や唱歌を聞いた時には、殆ど何もかも忘れて居た」のであり、国木田独歩の『あの時分』に、クリスチャンの木村と教会に説教を聞きに行く途中で、「君はベツレヘムで生れた人類が救主エス、キリストを信じないか」と聞かれ、この「ベツレヘム」という言葉にかつてないものを感じる「花やかな煌々とした洋灯」、「熾にストーブが燃えてある」、「毛は肩に垂れて真白な花を挿した少女や其他」、「高い天井、白い壁、其上ならず壇の上には時ならぬ草花」は、「うら若い青年、未だ人の心の邪なことや世の態の峻しい事など少しも知らず……美しい事、高い事、清い事、そして夢のやうなこと計り考へて居た私」の心を激しく動かした。藤村や独歩がキリスト教に接して感じた世界は今までの日本の中には見られなかった世界であり、日本の中の縮小された西洋である。これらのものは明治政府の欧化政策と相応してあちらこちらで行われた。

この時期のキリスト教会の特色は、従来キリスト教と関わりがなかった上流社会の人々が付和雷同の如く、多数教会に加わっていることである。また、それが主に上流社会から行われたため、極端な保守国粹へ転化して行く要素も十分に含まれていた。明治二十年代の社会動向を見ると、それは、まさに明治の文芸復興あるいは精神革命と言われるほどであった。亀井勝一郎は明治の「感情革命」なるものを説き、バイブルの翻訳と、二葉亭による「あひびき」等のロシア文学の翻訳と、森鷗外らによって訳された詩集「於母

8) 久山康編『近代日本とキリスト教』—明治篇— (昭和三一年四月、創文社)

影」、植村正久によって訳された「新撰讚美歌」と、透谷の論文等々、—この「五つの仕事」が「明治文学を内から形成して行った」という。文学の場合は精神革命ならぬ「感情革命」を果たしたのであり、感情革命という点からいうと、「大きな役割を果たしたのは讚美歌だと思う」（久山康編『近代日本とキリスト教』—明治篇—）。そして、亀井は「新撰讚美歌」を信仰としてではなく、情緒として受け取られるという点も指摘している。

明治十年代を維新に続く新しい国家建設時代と規定すると、明治二十年前後からは、ある程度政治運動も沈滞局面に入り、道徳や宗教が問われ、国家主義的なものも出はじめ、資本主義も漸く形を整えて行く時期であり、個人の自我、民族の自我というものが萌ざす時期でもあった。やがて、国家主義の台頭とともに、キリスト教は天皇を頂点とした国家権力の圧迫を受けることになる。この国家主義時期は欧化主義時期と重なって複雑な現象を持って現われるが、内村鑑三の不敬事件、教育勅語における宗教上の儀式や教育の禁止など目に見える形で圧迫が始まり、やがてキリスト教は衰退を辿ることになる。

三 藤村詩と讚美歌

藤村の思想の根本には、キリスト教、それもプロテスタント思想があり、彼の文学の出発点は「詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げに、わが歌ぞおぞき苦闘の告白なる」（『藤村詩集』）という宣言である。ここでいう告白とは、近代的な自我をともなったヨーロッパ的な意味での告白である。藤村が本格的に文学修業に入ったのは二十歳前後で、彼が一番愛読した書物は、ルソーの『懺悔録』とルナンの『耶蘇』である。この二つは藤村たち青年の共通の愛読書であり、その中でルソーの『懺悔録』の影響は大きかった。教会での生活は、彼に告白の自由があることを教えてくれた。藤村が自己形成を行った「文学界」の同人らの間には、既にキリスト教の思想が浸透していた。彼らによって発せられる自由恋愛の主張、その反動としての肉欲を〈罪〉と認識する態度、それが藤村文学の一生を貫く霊肉の闘いとなった。

キリスト教の影響は、讚美歌からはじまる。キリスト教布教活動のために讚美歌の日本訳が行われ一般に流布されたが、それが藤村の新しい詩型に採用され、藤村の詩法がここに見事に誕生する。

ゆふぐれしづかに／ゆめみんとて／よのわづらひより／しばしのがる／きみよりほかには
／しるものなき／花かげにゆきて／こひを泣きぬ／すぎこしゆめちを／おもひみるに／こひこそ
つみなれ／つみこそこひ／いのりもつとめも／このつみゆゑ／たのしきそのへと／われはゆかじ

／なつかしき君と／てをたづさへ／くらき冥府までも／かけりゆかん （「逃げ水」）

讚美歌は華麗な恋愛詩に変えられている。この『若菜集』の「逃げ水」篇が植村の『新撰讚美歌』のパロディーであることはいうまでもない。亀井勝一郎は、この「逃げ水」では「〈いのり〉は〈ゆめ〉となり、〈かみ〉は〈きみ〉となり、〈めぐみ〉は〈こひ〉となる」—ここに「一種の背信」を、キリスト教信仰に反した「異教美への陶醉」を見ている。これが藤村の「こころみた第一の破戒」（『島崎藤村論』）だったと言う。三好行雄は「讚美歌の改変という試みにおいてすでに背教的な『逃げ水』は、恋ゆえに神を捨てるというテーマにおいて、いっそう背教的である」（『島崎藤村論』）とも言う。しかし、この時点での藤村に背信や背教の意識の鮮明な自覚があったといいがたい。「こひこそつみなれ／つみこそこひ」と歌うが、ここに見られる〈罪〉の自覚は、罪をあえて人間肯定の開眼として拡張させようとする切ない努力にすぎない。

この『逃げ水』が植村の『新撰讚美歌』を踏まえて生れた事は意味深い。当時の旧約詩篇、雅歌などの翻訳、『新撰讚美歌』（明治二一年）が明治新体詩に与えた深い影響を見ることができる。また植村による、ワーズワース、テニスン、ブラウニングなどの外国文学の紹介、批評を貫く「文学上の理想主義」が、「文学界」同人の浪漫主義運動を生み出す媒介となったことは周知のところである。同時に植村の評文が「文学を国民の啓蒙、教導の具とする文学観⁹⁾」にあったことも見逃すことはできない。藤村の「逃げ水」を通して、明治時代のキリスト教プロテスタンテズムの作家の一面を見ることができる。

四 『破戒』断章

尤もその頃は心も動揺して居たし、歳も若かつたので、『破戒』を充分に読んだとは言へなかつたが、臆気ながら、此書を通して、近代人の考へ方といふものが、私の頭に解るやうになつて来て、直接に自然を観ることを教へられ、自分等の行くべき道が多少理解されたやうな気がした。

（「ルウソオの『懺悔』の中に見出したる自己」）

〈近代人の考え方〉とは、「近代的自我の目覚め」と「自己思考における自由¹⁰⁾」と言えよう。藤村はこのルソーの「懺悔録」で近代人の考え方、生き方から自然や生を観ることを学んだ。そして明治時代にあつて、時代の先駆者である透谷を通して、従来の因

9) 佐藤泰正「植村正久における文学」（「文学」一九七九年四月、岩波書店）

10) 伊東一夫『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』（昭和四四年三月、明治書院）

襲や弊習の束縛を逃れて自由で自然を観る見方、すなわち「近代人の考え方」を習得したのである。ルソーの「懺悔録」と透谷の生き方とは、以後の藤村の生涯を決定するような影響を与える。藤村文学は自伝文学、自己告白の文学として位置付けることができるが、藤村はルソーの「懺悔録」によって、自伝文学、告白文学というものを学んだのである。「真の束縛を離れてこの『生』を観」よとする精神こそ、告白精神であり、近代人の生き方である。そして〈近代人の考え方〉は彼の一生のテーマとして文学に描かれることになる。

自然主義文学は、ヨーロッパの自然主義とおなじく、人生の「真」を求めようとし、つとめて現実に密着し現実を深く掘り下げようとした。きれいな事の表面的現実をしか描けなかった硯友社の作家たちが敢えて触れようとしなかった人生の醜も悪も憚るところなく迫ってこれを剔抉しようとした。「現実暴露」「無技巧」ということがモットーとされ、非遊戯的であり平凡であることを旨とした。自然主義の作家に課せられた仕事は、平凡な個人の、現実的な日常生活のなかに個我を追究することであった。ヨーロッパの自然主義文学の場合、すでに崩壊した個我は意味を有しない、追究の対象とならないものであったのに、わが国の自然主義文学は、こうして浪漫主義の果し得なかった仕事を継承する宿命を背負ったのであった。¹¹⁾

ここには日本自然主義文学がヨーロッパでのように浪漫主義の反動として起きたものではなく、浪漫主義の継承の方をとらざるを得なかった理由が述べられている。日本自然主義文学は社会的、政治的重圧のために、批判意識を育てられなかった。自然主義文学者らを取り上げる現実とは、国家や社会から離れた形の生活の現実であり、個人であった。こうした傾向が自己告白的性格を獲得し、一つのジャンルとして固まっていく。日本の自然主義小説の中にも、国家主義や封建主義に対する抵抗や、個の解放の闘いが表現されてはいるものの、実際の作品の中では、その批判力は限られている。このような日本の自然主義文学の小説の中で、『破戒』が国家権力批判及び社会批判を行ったことは稀有なことである。それ故に、この『破戒』は日本自然主義の文学の中で稀に見る可能性を示す作品として注目されることになる。

藤村が仙台時代の幕を下し、明治三二年四月、小諸義塾の教師として信州小諸に赴き、そこに七年間留まる。そこで彼は、『緑葉集』など写生、習作のスタディの世界に入り、田園のスケッチ「千曲川のスケッチ」「旧主人」「藁草履」など、諸短篇を発表する。藤村の小諸時代は日本の文学上における三つのジャンルの文学が芽生えた時期でもある。その三つとは、田園文学的なるもの、社会小説的なるもの、ゾライズム的なるもので

11)川副国基「わが国自然主義文学の特殊性」(「国文学解釈と教材の研究」、昭和四二年七月)

ある。この同じ時期に『破戒』が構成されたことは記憶されるべきである。「『田園文学』と呼ばれたものおよびこのジャンルに近接する『写生文』が盛んになっていることと、日清戦争後の現象として社会小説的なものが興って来ていることと、遺伝と環境とから説こうとするいわゆるゾライズムの影響を特に強く受けた系統の一群の作品がおこりつつあることを指摘することが出来るであろう」（和田謹吾「『破戒』の史的 position」）。その時代の潮流の中において、藤村は『破戒』に至るまでの小説の傾向を、『緑葉集』の序で次のように述べている。

『藁草履』はその最初のころみで、千曲川の上流に沿ふた山村の民情を主にしたものである。そこは南佐久の奥、野邊山が原を経て甲州に接した深い谿谷の間で、田舎の中の田舎とも言ふべきところ。それから予は同じ川の中流下流に沿ふて散布する都会と村落とを舞台にして、様々の習作を試みた。則ち、『水彩畫家』は北佐久を、『老嬢』は小県を、『朝飯』は上水内を、『破戒』はまた下水内の飯山を。飯山となると、もうずっと下流の方で、川上から押流して来る泥砂は兩岸に盛上つて、その間を流れる水が蒼茫とした大河の趣をなして居る。

（『緑葉集』序）

藤村の初期散文に田園文学的な写生の要素が色濃く見られることは言うをまたない。しかし、この藤村の言葉をそのまま肯定するより、彼の初期散文は別の角度から考えるべきである。『破戒』における「田園文学」的要素は時代の潮流や、文壇の動きに敏感であった藤村の、一つの適応であったと考えられる。

作品『破戒』が上梓された年、即ち明治三十九年（一九〇六）の五月、『破戒』に対して島村抱月は、「予は此の作に対して、小説壇が始めて更に新しい廻転期に達したことを感ずるの情に堪えぬ。欧羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に傳つた生命は、此の作に依て始めて我が創作界に対等の発現を得た¹²⁾」と述べた。この世に自然主義の代表的な作品として評価を得た、これが最初である。

『破戒』の主題は主人公瀬川丑松の〈破戒〉である。そして大方の『破戒』論は、その主題に焦点を合わせて、作者による主題の解決の仕方に疑問を抱いたために、社会小説であるか、告白小説であるか評価が二分する。前者のタイプの代表論としては、その素材ととらえ方について、蔵原惟人から野間宏まで幾多の指摘がなされている。

藤村の「破戒」一巻は確かに当時のプロレタリアートをも含む所謂「下層社会」の先頭に立っていた、従って未だ革命的であった我国小ブルジョアジーの大ブルジョアジーに対する嵐の如き抗議の声であったと見る事が出来る。そしてその武器となっているものが国

12) 「自然主義と反自然主義」（『現代文学論大系』2、昭和二八年十一月、河出書房）

家主義、官僚主義に対する所謂「個人の自由」個人主義であったのである。13)

「技巧」「洗練」に対する明瞭な概念は保留したまま、蔵原惟人は藤村が当時の社会の「真実」を描いたところのみ評価する。「革命的階級の立場」に立つことによるのみ見ることの出来る「真実」を描き出すことは、歴史社会的現実を文学的現実結び付ける文学観の危うさを伴う。そのために『破戒』を最近では社会小説というより、自己追究型の告白小説として見る傾向が主流となっている。

藤村文学の出発点は「わが歌ぞおぞき苦闘の告白」なる、『若菜集』の詩人としてであった。彼にとっての「告白」は「真の束縛を離れてこの〈生〉を観」ようとするルソーの近代精神がその根底に潜ませていた。それが『破戒』の主人公瀬川丑松の告白に蘇るのである。

破戒の告白は極めて低次元からなされている。部落民出身者が教育者としてあることへの謝罪、要するに封建的身分の存在を認めることは、「同じ人間であり乍ら、自分等ばかりそんなに軽蔑される道理が無い」という昂然たるレジスタンスと抵触するものである。14)

『破戒』は丑松の〈破戒〉である。しかし、『破戒』における〈告白〉は極めて低次元のもので、真の〈破戒〉は到来したのではない。第二の「破戒」、あるいは第三の「破戒」が生み出されるべきであった。「目覚めた人間の悲しみ」は、〈低次元の告白〉によって、自らを再生させる内面的な解放が求められる。藤村にとって告白は彼の人生が懸けられている。告白は藤村自身の「求道的な生き方を示すものであるとともに、また彼の文学的生涯を貫く生の基調¹⁵⁾」であり、そこでこれを支える宗教的性格が、主題の核心となってくる。藤村文学は、『若菜集』以来、自己凝視からくる自己告白の文学というところにあったと思われる。この意味で丑松の上に作者藤村が見事に反映され、漱石は「軽薄なものばかり読んで小説だと思つて居る社会にこんな真面目なのが出現するのは甚だうれしい事と思ふ」「明治の代に小説らしい小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ¹⁶⁾」と評したように日本における最初の近代小説として不動の位置を確保する。

『破戒』は、日本社会の封建性のゆえに、同じ人間でありながらいわれなき差別を受ける被差別部落民をテーマにした小説である。そのテーマに流れる思想、つまり被差別部落民も同じ人間であるという観念は「透谷の『内部生命論』に示されたようなキリスト教の人格観念から得たものだったと考えるのが自然¹⁷⁾」であろう。作品において、丑松は、神

13) 蔵原惟人「自然主義文学の消長」(『日本プロレタリア文学大系』二、一九五四年十月)

14) 長谷川泉『近代名作鑑賞』(昭和三三年六月、至文堂)

15) 同註10

16) (森田草平宛書簡)

への信仰を示しているわけではない。強いて丑松における信仰というべきものを指摘するならば、猪子を人神として敬慕し懺悔告白する心情が宗教性を現すにすぎない。これは「神から離れながら、藤村のキリスト教的世界に対する思慕から導かれた発想に基づく¹⁸⁾」ものであると考えられる。

同じ自然主義の作家であったといっても、藤村、独歩、白鳥などプロテスタントの洗礼を受けた作家たちと、花袋、秋声、秋江などキリスト教とはほとんど関わりを持たなかった作家たちとは、自然主義といっても、そのリアリズムの相違が認められる。藤村、独歩、白鳥の自然主義リアリズムには、彼らがクリスチャンであったことを無視できない文学的な残滓がある。

五 『春』断章

藤村は『破戒』の執筆中に第二の長編『春』の構想が沸き上がって来た。「『破戒』を書いてるうちに『春』は既に私の内部に芽ぐんで来た」（「市井にありて」と藤村はその感想でしばしば指摘している。確かに『春』は『破戒』の同一線上に生まれた作品にはかならない。藤村は丑松に託して「自我の青春を、いひかへれば時代の抑圧と硬塞のもとに早く目覚めたための苦しみを苦しんだ自己の姿を改めて再認識しよう」とし、『春』の岸本に「自己の青春のなかにあつた近代を確認する試み¹⁹⁾」をさせている。

藤村は明治二七年夏頃（二三歳）、ドストエフスキーの「罪と罰」とルソーの「懺悔録」を読んで深く感化される。その感化の深さについては「ルソーの『懺悔』の中に見出したる自己」において印象が述べられている。藤村におけるルソーの意義は、藤村自身の自己と近代精神の本質についての認識を目覚めさせたことである。二三歳頃の藤村と言えば、佐藤輔子への恋から関西への傷心の旅を経て〈恋愛の重荷〉から逃れている時期である。そのかわりに〈生活の重荷²⁰⁾〉にあえぐことになる。母、廃痴者の三兄、長兄秀雄の不正事件。これら弱い人たちの運命を一身に背負うことになったからである。また、親友の透谷の自殺で強い衝撃を受けてもいた。しかも自分自身の道もいまだ定まらず、放浪する。私生活の諸々の問題を抱えつつあったのが、ちょうどこの『春』の頃であった。

『破戒』を書いて、大きな反響を起こした藤村は、『春』『家』『新生』と自伝的な

17) 同註10

18) 同註10

19) 三好行雄『島崎藤村論』（昭和四二年四月、至文堂）

20) 同註19

告白小説を次々に発表する。しかし、『破戒』から『春』に到る間は、日本の自然主義文学が辿る道程とは、大きな相違が生じている。しかも、『破戒』と『春』との相違は極めて重要であると思われる。これらの相違というものは、『破戒』は被差別部落民という特殊階級を取り扱った、いわば社会悪を暴露し、その改善を計ろうとする一種の社会小説であったのだが、『春』はそのような社会問題小説ではない。『破戒』は作者をある人物に託した「空想物語²¹⁾」であるが、『春』は作者の真実をありのままに描いた小説である。もう一つ、『破戒』を書く時は結構きちんと用意されていて、背景や登場人物などの案を立てていたが、『春』は一切の結構を立てず、人物の構成もさほど劇的構成の効果が見られないという点が挙げられる。藤村文学は『春』以来、もっぱら『春』の創作手法を一貫させているのである。中村光夫が指摘しているように、藤村の作品系列として『破戒』と『春』の間には何か断層が感ぜられる。その背景には花袋の『蒲団』の影響があった。そこで藤村は『春』の道を選んで黙々と作家的生涯をまっとうすることになる。

『春』のテーマは三つに分類できる。

一つ、時代の先駆者として透谷（青木）を中心に展開する青春群像を点描し、それら青年たちの中に透谷を浮き彫りさせて描いている。藤村は透谷を「戦ひの人としての透谷」、「精神の自由を求めてやまなかつたやうな彼」、「私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ」（「北村透谷二七回忌に」と、〈近代人の考え方〉を追究した一人として描いている。

二つ、自由恋愛によって封建的な前近代性から脱するという近代人の精神。それは「思へば、言ふぞよき、ためらはずして言ふぞよき」（『藤村詩集』）という自我の発見でもある。そして、それは「またキリスト教の告白の理念に導かれながら、同時にマリア崇拜的な処女憧憬にもつながる²²⁾」ものである。明治学院では毎週文学会が開かれ、女学生の口唇からは西洋の近代詩が朗読されたりする。このような雰囲気の中で、藤村はシェークスピア、ダンテ、ゲーテ、バイロン、ワーズワースらを読み、文学を生涯の営為として定める（『桜の実の熟する時』）。

三つ、『家』への発展。藤村は「それから『春』を書いてるうちにまた今度は『家』を書かうといふ意匠があとから芽ぐんで来ました」（「『春』のことから」と述べている。「理想の春」に欺かれて死ぬ青木（透谷）、「芸術の春」を求めて失敗する岸本（藤村）は構想どおり描くことができた。そして「人生の春」に到達する青年を描こうとしたが、そこで作家藤村を取り巻いている大きい封建的な〈家〉の壁に逢着する。この点について三好行雄は「人生の春」という主題は執筆の過程で〈家〉の発見によって変

21) 藤井義明「『家』と『春』」（『島崎藤村研究』昭和三六年二月、東京堂）

22) 村松定孝『島崎藤村』（昭和三五年九月、角川書房）

更あるいは瓦解したと論じ、これが現在では定説化している。²³⁾

六 『家』断章

藤村は『春』を上梓した翌年（明治四二）、第二の短篇小説集である『藤村集』を刊行する。ここに収録された諸篇は、黄昏（明治四〇・六）並木（同）壁（明治四一・十）収穫（同）一夜（明治四二・一）伯爵婦人（同）群（同年二）旅（同年三）青年（同年五）弟子（同年六）死（同）土産（同年七）雑貨店（同）河岸の家（同年八）奉公人（同）芽生（同年十）、の十六篇である。この内「壁」「一夜」「群」「青年」「雑貨店」「奉公人」「芽生」の七篇は、後の『家』に何らかの形で取り入れられている。しかし、『家』は、「壁」以下の諸短篇群作品集としてではなく、新たな一遍の長編として構成される。

周知のとおり、『家』は、藤村の二七歳（明治三一年）から、三九歳（明治四三年）までの十二年間を藤村の生家である島崎家（小泉家）と、姉園子の嫁ぎ先の高瀬家（橋本家）を素材とした自伝的作品である。この小説には大きく分けて二つの〈家〉が描かれている。一つは半封建的な〈旧い家〉、もう一つはそれに対抗する近代的な〈新しい家〉である。〈旧い家〉と〈新しい家〉との対立は、「伝統的家族制度とその生活感情（習俗・道徳）がどのようなものであるか、これを典型的に描きながら、自我にめざめた近代の個人にとっては桎梏であり、これから逃れようとする抵抗がどのように本人に跳ね返るかを明らか²⁴⁾にする。『家』のテーマについては、吉田精一が『自然主義研究』で、次のように整理している。

- 1 この封建的な両名門が次第に衰微、没落する過程をとらえること。
- 2 そうした旧家の古風な家族制度に対する、新しい家を構成しようとする小泉三吉一家、橋本正太一家の対比。
- 3 個人生活を重圧する旧い家族制度や家長制の解剖。
- 4 「家」を形づくる血統、あるいは遺伝。

封建制度の中枢である家族制度の秩序は、時代の流れとともに資本主義社会制度の発展の前に崩れつつあり、それはまた伝統を保った地方豪家・地主階級の没落過程でもある。〈新しい家〉を築き上げようとする小泉・橋本家の新旧勢力の葛藤、〈旧い家〉の前近代的な夫婦関係と、〈新しい家〉の近代個人主義的夫婦関係とが対比される。またその中での〈新しい家〉の葛藤の中で、最後に正太の死によって作品の幕がおろる。

23) 同註19

24) 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』（昭和三四年七月、実業之日本社）

体面を重視する小泉家の姿は、三吉の盛大な結婚のための借金、命令的に金の無心の電報をよこした家督実、借金の証文に叔父の判を頼む正太、姪の結婚に親代りで仕度をしてくれる叔父・達雄などによって描かれる。これに対して新興の名倉家の父は「兄弟を助けるのは間違つてゐる。借金して人を助けるなんて、そんな法はない」と批判する。いわば、〈家〉中心の「封建的なモラルと、個人主義のモラル²⁵⁾」が明らかに対立するのである。そして第四の〈血統〉〈遺伝〉に対する問題点は、藤村の小諸時代の創作「旧主人」「藁草履」「老嬢」「水彩画家」などが「不倫と内の香に満ちて²⁶⁾」いたように、藤村作品で常に提出されている。それは「抑圧された性の暗い情念が、妻の裏切りという事実によって一層陰惨に燃えあがったところに生じたものだった²⁷⁾」からである。

『家』においては、この〈血統〉〈遺伝〉は橋本小泉の両家の〈家〉の問題として提出される。橋本家の正太は〈家〉に「放縦な血が流れて居る」と考える。だが、『家』でより多く問題となるのは小泉家である。小泉家には「実が宗蔵を嫌ひ始めたのは、一度宗蔵が落魄した姿に成つて故郷の方へ帰つて行つた時からであつた。其頃は母とお倉とで家の留守をして居た。お倉はまだ若かつた」という、お倉への情念を抱いていたらしい宗蔵がいる。「放蕩の報酬サ」「余程質の悪い婦女にでも衝突つたものでせうかなア」という淫乱の血の問題である。姪のお俊に対して奇妙な情念が、不思議な力に引かれ「姪の手を執らせた」（『家』）三吉がいる。彼らの姿は〈血統〉の問題として『家』に取り上げられている。半封建的な習俗と近代精神は『家』において凄惨きわまりないほどの闘いを演じる。そこで藤村は敗北しかかっている。それはやがて『新生』の〈新生事件〉により完全に近代精神の破綻をもたらし、「社会的にも道徳的にも開花した近代の人の種族の中に、未開な時代の野性をもつて生れて来るものも有り得る」（『新生』初出八十）と自己弁明を試みることになる。

七 『新生』断章

藤村が神戸港からエルネスト・シエン号に乗り込んでフランスに旅立ったのは、大正二年（一九一三）四月十三日であった。藤村四二歳、「新生事件」の最中であって、藤村が「海の外」へ必死に逃れ出た大正二年は、「諒闇」であった。明治四五年七月三十日明治天皇崩御。同年九月十二日、漱石と鴎外に大きな衝撃を投げ掛けた乃木将軍の殉死事件が起こっている。漱石は『こころ』の中で、主人公に「私は明治の精

25) 吉田精一『自然主義研究』下巻（昭和三三年一月、東京堂）

26) 荻久保泰幸「芥川竜之介の「新生」批判について」（『国学院雑誌』、昭和三三年三月）

27) 同註26

神に殉死する」と語らせ、鷗外は乃木將軍の殉死に触発されて、「歴史小説」の時代を開くことになる。まさに「明治の終焉」のただなかである。

藤村の渡仏事件については、従来様々な説が立てられてきた。笹淵友一が現実からの逃避説を打ち立てる一方、伊東一夫はこの渡仏について、一般的なパリの憧憬を伴うこの旅が、「贖罪の行為に擬せられる」と言い、「隠れた罪を犯したものの苦難を負うべき時が来た」という藤村の一節を引き出し、「罪悪よりなお一層なる苦行を積み重ねることによって、過去の罪過を償おうとする勇気ある求道者とたらんとしたことである²⁸⁾」と述べている。藤村は〈新生事件〉の最中に、『桜の実の熟する時』を書き続ける。彼がこの作品を書いているとき、語らねばならなかったのは〈新生事件〉であった。それなのに彼は、そのことについては何も触れず、〈恋のために教会を退ける〉という懊悩を書いていたのである。

フランスから帰国した藤村の最初の仕事は、『新生』の執筆であった。大正七年五月から翌年十月まで「東京朝日新聞」紙上に発表された『新生』は、様々な反響を巻き起した。この作品の評価については多くの論議を呼んでいる。

亀井勝一郎は「藤村が青年時代に心に戦った宗教と芸術のさゝやかな相剋が、『新生』をかいたときの彼の胸に去来してゐたことは明らかだ²⁹⁾」と評している。作家にとって、作品の素材や表現上の内容は〈芸術〉、すなわち文学上の問題である。一方で〈宗教〉はきわめて作家個人の内的問題といえる。

多くの苦痛と艱難を背負ってフランスへの旅に出、「自分のやうなものでも、どうかして生きたい」と叫び続けた藤村は、ここに来てまたも人間的な自己を生かした新生への道に至ったのである。神を慕って生涯を送ろうと、キリストに向かった自己を見つめて、熱い涙を流し、神の周辺をさまよう子羊のような姿勢を取りながらも、ついにキリスト教の神の再臨—あくまでも文学的な—を見ぬまま『若菜集』的世界に見られる東洋の詩人の憂鬱と寂寥感が、そのまま『新生』にも現れたのである。藤村は、芥川竜之介の「老獪な偽善者」という批判に対し、「芥川君は懺悔とか告白とかに重きを於いてあの『新生』を読んだやうであるが、私としては懺悔といふことにそれほど重きを置いてあの作を書いたのではない」「生きながらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に生き返る日も来たと言つて見たいつもりであつた³⁰⁾」と、自らの心を素直に書いている。『新生』は〈懺悔〉〈告白〉に重きを置いたものではなく、「罪からの再生と霊の世界に憧れる序曲として捉える³¹⁾」べきであり、地獄から抜け出し煉獄の世界に身を置こうとする藤村の畢生の文学であつたのである。

『新生』は藤村の心からなる告白を強く意識した小説である。この中の『仮りに人生の審

28) 同註10

29) 亀井勝一郎『島崎藤村論』（昭和二八年二月、新潮社）

30) 「芥川竜之介のこと」（『市井にありて』）

31) 同註10

判があつて、自分も亦一被告として』（『新生』一の九八）「『一切を皆の前に白状したら』（中略）これが自分だ、捨吉だ、と言ふことが出来たなら」（『新生』二の九二）はルソーの「懺悔録」の冒頭の宣言を踏まえたものである。

最後の審判のラッパはいつでも鳴るがいい。私はこの書物を手にして最高の審判者の前に行こう。高らかにこう言うつもりだ—これがわたしのしたこと、わたしの考えたこと、わたしのありのままの姿です。よいこともわるいことも、おなじように率直にいいました。³²⁾

『新生』は罪との深刻な対決である。まさに亀井勝一郎のいう「宗教の一步直前まできて、宗教よりも作家の強烈なエゴイズムの方を採つた³³⁾」のである。しかし『新生』の〈告白〉後、「新生」には結局何等の新生も無かったと反省する。「新生」が新生であるというのは、それが未だに達成されないところにある。「わが心にあらず、御心のまゝに」は、節子の岸本宛ての手紙であるが、これは藤村の告白後の気持ちでもある。

八 『夜明け前』から『東方の門』に至るまで

藤村が積極的に父を思い出したのは、「いきながらの地獄」からぬけだしたフランスの旅からである。藤村は〈新生事件〉によるフランスへの旅を単なる脱出行ではなく、求道者としての贖罪の旅と思い、自己の再生の転機をひたすら求めていた。第一次世界大戦のただなかに、祖国と民族のために戦死したフランス人に愛国心を見、戦後のパリの復旧を目のあたりにする。そこから再生、死の中から持ち来す回生の力を感じたのである。回生の力は「新生」への道へ導くことになるが、同時に、生の肯定は、日本への回帰をも導く。新たに日本を顧みる機会を得たことになる。つまり第一次世界大戦を経て、戦後のパリの復旧という目覚ましい動きの中でフランスの「伝統の回復」を目のあたりにしたことが、「伝統の回復」への新たな自覚は、彼を日本の民族や伝統へ目を注がせることになる。

この時点での栗本鋤雲との邂逅は、藤村の十九世紀日本の研究という大きなテーマを生み出す。藤村における近代とは、本居宣長の死あたりから始まる日本の十九世紀を広義の近代として見出す認識である。日本の中世とは、中世から近世までを含めた封建時代として再認識するところまでに至る。藤村は十九世紀を「父の時代」とも呼ぶ。フランスにあって藤村は近代西欧の文明に接し、その体験を足がかりに自分自身の精神の内部に

32) 桑原武夫訳『ルソー告白』（一九六五年三月、岩波文庫）

33) 同註29

存在する「時代の子」としての父正樹を発見する。父正樹の霊は、『破戒』以来、いつも彼の作品の中でマイナス要因として描かれる。『夜明け前』では、『破戒』以下で語り続けた父の像とは違った、新しい夜明けの「時代の子」としての父正樹と自分とを重ね合わせ、亡父と自分との間を往来する。

藤村は、「近つ代」を信じて激動期を生き、なおかつ死んだ半蔵の生涯を振り返ることで、半蔵の人生を支配した国学の意味を探り始める。平田派の門人である半蔵は、本居宣長の思想に心酔している。本居宣長の思想は「自然に帰れ」という言葉に纏められている。半蔵は「古代に帰ることは即ち自然に帰ることであり、自然に帰ることは即ち新しき古を発見することである」と考える。半蔵らの国学者は本居宣長の復古思想の実践・実行を目指していた。実践・実行の精神は平田篤胤の説くところであり、黒船来航以降の時代状況とともに、国学者たちに大きな影響を与える。そこには勤皇攘夷と宗教改革運動の二つの流れが現れる。

明治維新を迎え、半蔵たちは活発な動きを見せ始める。この活動の中身は「中世の否定」であり、中世の否定とは封建性への反抗でもあった。王政復古になったが、復古の現実とは下から見上げる民衆としての半蔵たちの待ち望んだものとはうらはらなもので、やがて彼等の期待は裏切られることになる。「新しき古」を期待する半蔵の理想とは離れて現実の政治は祭政一致から祭政分離の方向に変わって言った。「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した」と半蔵を嘆かせる。まさに半蔵の悲劇は、理想が時代に敗れた運命の悲劇でもあり、「慷慨の士を以て狂人と為す悲しからずや」と叫びながら半蔵は生涯をとじることになる。日本の国民が「中世以来の体験を基礎とすることなしに、何処に父等は第二の春を求め得たらうか」（「回顧」）。この一節は藤村の言葉である。藤村は父が平田派の「中世の否定」という説に固執しすぎたことを批判し、今日の日本が「中世以来の体験を基礎」として成り立っていることを主張している。ここに『東方の門』のテーマが成立する。

藤村は松雪和尚に托して、〈中世〉を否定した半蔵等の思想が彼等の敗北の原因であり、「中世の門を開くことなしには／古代の門に達し難し／随つてまた近代の意味を／知る能はず」（「雑記帳」ろ）と中世の本当の意味を作品の中で解明しようと企図した。そして先人等が日本の外の世界に求めたものは何かを調べ、東西文化の交渉、交流へと関心を広げようとした。

島崎藤村作品の引用すべては、筑摩書房版（『藤村全集』）に拠った。

【参考文献】

- ・ 秋田雨雀編『島崎藤村研究』楽浪書院 昭和九年十一月刊
- ・ 武藤直治『島崎藤村』新陽社 昭和十一年四月刊
- ・ 島崎静子『藤村の思い出』中央公論社 昭和二五年五月刊
- ・ 亀井勝一郎『島崎藤村論』新潮社 昭和二八年十二月刊
- ・ 田中宇一郎『回想の島崎藤村』四季社 昭和三十年九月刊
- ・ 久山康編『近代日本とキリスト教』一明治篇一 創文社昭和三十一年四五月刊
- ・ 稲垣達郎『日本の近代文芸と早稲田大学』早稲田大学 昭和三二年十月刊
- ・ 平野謙『島崎藤村』五月書房 昭和三二年十一月刊
- ・ 吉田精一『自然主義研究』下巻 東京堂 昭和三十三年一月刊
- ・ 長谷川泉『近代名作鑑賞』至文堂 昭和三十三年六月刊
- ・ 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』実業之日本社 昭和三四年七月刊
- ・ 笹淵友一 「『文学界』とその時代」明治書院 昭和三五年一月刊
- ・ 村松定孝『島崎藤村』角川書房 昭和三五年九月刊
- ・ 吉田精一『吉田精一著作集』六 桜楓社 昭和五六年七月刊
- ・ 『島崎藤村』Ⅱ『日本文学研究資料叢書』有精堂 昭和五八年六月刊
- ・ 「国文学解釈と教材の研究〈特集透谷と藤村〉」昭和三九年六月刊
- ・ 「解釈と鑑賞」別冊『現代のエスプリ島崎藤村』昭和四一年五月刊
- ・ 「解釈と鑑賞〈自然主義と反自然主義〉」昭和四三年九月刊
- ・ 「国文学解釈と教材の研究〈島崎藤村と日本の近代〉」昭和四六年四月刊
- ・ 「解釈〈特集・島崎藤村研究〉」昭和四九年七月刊
- ・ 「信州白樺〈特集藤村〉」昭和五十年四月刊
- ・ 「解釈と鑑賞〈島崎藤村の再検討〉」平成二年四月刊
- ・ 「島崎藤村研究」 「風雪」第一集～第十集
- ・ 「島崎藤村研究」第五号 昭和五四年十二月刊
- ・ 「島崎藤村研究」第十四・十五合併号 昭和六二年六月刊

要 旨

作家藤村の明治期におけるキリスト教の影響と、キリスト教への接近と離反を通して、藤村の苦悩・葛藤の文学的意味を各作品に即して明らかにする。西洋近代思潮・ルネッサンスとしてのキリスト教の受容、近代精神による自我の目覚めは、古い道徳・価値観に支配されている社会との衝突を呼ぶ。藤村が近代精神と古い道徳・価値観とどういう対決をしたかを明らかにしていきたい。藤村が積極的に父を思い出したのは、「いきながらの地獄」からぬけだしたフランスの旅からである。藤村は〈新生事件〉によるフランスへの旅を単なる脱出行ではなく、求道者としての贖罪の旅と思い、自己の再生の転機をひたすら求めていた。第一次世界大戦のただなかに、祖国と民族のために戦死したフランス人に愛国心を見、戦後のパリの復旧を目のあたりにする。そこから再生、死の中から持ち来す回生の力を感じたのである。回生の力は「新生」への道へ導くことになるが、同時に、生の肯定は、日本への回帰をも導く。新たに日本を顧みる機会を得たことになる。つまり第一次世界大戦を経て、戦後のパリの復旧という目覚ましい動きの中でフランスの「伝統の回復」を目のあたりにしたことが、「伝統の回復」への新たな自覚は、彼を日本の民族や伝統へ目を注がせることになる。

キーワード：キリスト教の影響、葛藤、離反、近代精神、古い道徳、キリスト教の受容

투 고 : 2010. 5. 31

1차 심사 : 2010. 6. 12

2차 심사 : 2010. 6. 26